

平成24年度 山口市医師会女性医師部会総会報告

田村 博子

平成24年度山口市医師会女性医師部会総会が、6月2日(土)18時より山口市医師会館講堂で行われました。出席者は顧問の男性会員を含めて12名でした。

最初に野瀬橘子部会長より、平成22年12月のこの部会が設立されて以来、会員同士の親睦を深め、いろいろな活動を始めているが、まだ短期間のことであるので、今後一步一步たくさんの会員の参画により大地に足をつけた活動をしていかななくてはならないとのご挨拶がありました。

次に吉野文雄医師会長より、この会の意欲的な活動に敬服している、医師会も全面的なバックアップをするつもりであるとのご挨拶をいただきました。

議事内容は以下の通りです。

1. 平成23年度事業報告：野瀬部会長より報告。

1) 総会

平成23年6月11日(土) 山口市医師会館講堂
記念講演：「いま、女性医師に期待されるものは」
山口大学大学院医学系研究科教授
松田昌子先生

2) 研修会・懇談会(吉南医師会女性医師部会との合同)

平成24年1月5日(木) やご家

①「COPDの診断と治療最近の知見を含めて」

山口赤十字病院内科部長 國近尚美先生

②「乳幼児の難治性中耳炎」

ののほなクリニック院長 兼定啓子先生

3) 役員会 平成23年4月28日、9月15日、 24年3月1日

2. 平成24年度会計監査報告

会計報告：佐々木映子委員より下記報告がされました。

収入の部

会費(1,000×28人)	28,000円
市医助成金	200,000円
雑入(懇談会出席者負担金等)	74,000円
預金利息	6円
合計	302,006円

支出の部

総会費	84,000円
役員会費	3,000円

研修会費	206,310円
合計	293,310円
次年度繰越金	8,696円

会計監査報告

赤川晴美先生より監査結果が適正であった旨の報告がなされました。

3. 平成24年度事業計画

1) 総会：平成24年6月2日

2) 研修会・懇談会：平成25年1月19日

3) 役員会：年3回程度開催予定

4) デルタ地区女性医師部会との連携会議の開催の検討

5) その他：山口県医師会男女共同参画部会行事への参加
アンケートの実施

4. 平成24年度予算(案)：足立佳世子委員より説明がありました。

5. その他：役員については今回は改選なし。

以上すべての議案が承認されました。

総会後 記念講演として心理カウンセラー、タップ療法士の阿波ひろみ先生の「命をみつめて小さな戦士達からのメッセージ」を聴きました。



「移植医療を見つめて」

あわ
阿波ひろみ

先日、6歳未満の小児の脳死下臓器提供（心停止後の腎提供はこれまでも年に1-2件行なわれている）が我が国で初めて行われた。

「息子は、私たち家族が精いっぱい愛情を注いで育ててきました。本日、私たちの息子は私たちのもとから遠くへ飛び立っていきました。私たちにとって大変悲しい事ではありますが、大きな希望を残してくれました。息子が誰かのからだの一部となって、長く生きてくれるのではないかと。息子を誇りに思っています。」とご両親からのコメントが読み上げられた。

私は、このご両親のコメントに涙が溢れ、手が震えていた。当時の自分たちの姿と重なった。

私たちの息子は、5年前アメリカで心臓移植手術を受け、今、奇跡の命の時間を生きている。日本の多くの方々善意に守られ、アメリカという国に救われた命だ。

当時、消え入りそうな息子の命を必死に守りながら渡航したアメリカの病院で、あまりに状態の悪くなっている息子が移植手術に臨んで生きる命であるかどうか問題となり、その時の息子の状態では、かなりのハイリスクであるカテーテル検査を余儀なくされた。そして、検査前にこの検査で息子が命を落とす危険性がとても高く、死に至った場合、ドナーとして臓器を提供する意思があるかどうか問われた。それまで、息子の命を繋ぐことに必死で提供を受けることしか考えていなかった私たちは、その質問をつきつけられ、はじめて提供する側の親の立場に立たされ、その気持ちを知ることになった。

説明を受けた際、即座に感じたのは“忌避感”だった。「こんなに辛く苦しい思いをしてやっとこのアメリカまで来たのに、この状態でハイリスクなカテーテル検査をまた受けさせられ、そこで命が終わってさらに辛い目にあわなければならないなんて、やめてください！」と、とっさに思った。しかし、主人からの「宏典は、アメリカのドナーの臓器によって命を繋ぎに来たのだろう。だったら、その逆もありだろう。」という言葉で、その抵抗が承諾に代わる

のに長くはかからなかった。

私たちは、ドナーからの臓器提供を受け、息子の命を繋ぐためにアメリカまで来た。ドナーから提供される臓器によって、生かされるために。ならば、息子が死に至った時には、その臓器の提供を持って、アメリカの子どもの命を救うということもありだろう。もし、この検査の途中で命を落とし、その臓器を持って誰かの命を救うことができたとしたなら、息子は3歳という短い生涯であったけれど、1人の人間としてそれは大きな仕事を成し遂げたことになる。その偉業を遂げさせてやりたい。そして、息子の細胞はその子の中で生き続けられる。例えば細胞のレベルになっても誰かの中で生き続けてほしい。そんな思いで臓器提供に応じるサインをした。

息子は、そのカテーテル検査を無事乗り切り、どうにか生きることのできる命であろうと判断が下され、待機者リストに載せられた。息子の命の時間に余裕はどこにもなかった。ドナーが早く現れてくれないと息子の命の灯は消える。けれど、ドナーが現れるのを待つというのは、誰かのどこかの大切な子どもの命が終わることを意味しており、とても辛い待機時間となった。

様々な辛い処置を次から次に行い、いよいよ厳しい状態となった。24時間の利尿剤の点滴が続き喉はカラカラのうえ、39度7分の熱で体は燃え、水分摂取の制限はゼロを指示された。骨と皮になった手を差し出し、目に涙を浮かべながら、絶えず水分を求め続ける息子と地獄のような時間が続いた。ドクターから、もう移植手術ができなくなるかもしれないということをお願いされた。2日後命の限界がいよいよ差し迫った時にドナーとの巡り合わせをいただいた。

移植医療に対して無知であったころ、私も多くの日本人の方がそうであるように、移植医療に対して大きな壁を感じていた。しかし、すべてをこの目で見、自らわが子がドナーになることを認めるサインをした経験と実際に心臓移植手術をしてベッドの上から1歩も動けなかった子が走り回れるほどに元気になったその体と、

私たちがどれほどまでにドナーの命とその家族に感謝を捧げ、息子と共にあるドナーの命を愛しているか・・・、それらの経験を経て、今は脳死後（又は脳死体）からの臓器提供は深い愛の行為であり、消え入りそうな命と消えゆく命が紡ぎ合う移植医療は、大変尊い医療であると感じている。

1歳で病気がわかり、3歳の誕生日まで生きられないと言われた息子は、現在8歳となり奇跡の命の時間を懸命に生きている。毎日の薬と毎月の大阪への外来受診は必要なものの友達と元気に走り回り、とびきりの笑顔を私たちに見せてくれる。もし、病室で迎えた3歳の誕生日のあの時に、最期は私の腕の中で看取るのだと一度は断念した移植への道を目指す決心ができなかったら、今、こうして息子を抱きしめる時間はなかった。

毎年、移植手術を受けた日には、息子と小花を捧げ、ローソクに火を灯し、ドナーの子に感謝を伝える。そして、眠る息子の胸に手を置き、息子の命と紡ぎ合ったドナーの心臓に感謝と愛している気持ちを伝える。

「今日という一日をありがとうね。息子と共に生きるあなたを心から愛しているよ。ありがとう。ありがとう。明日も、一緒に命を輝かせてね。」

脳死となったわが子の心臓が止まるそのときまで寄り添いたいと願う親の愛があってもいいではないか。一方で、わが子が脳死となってしまった時、その細胞までが死んでしまう前に誰かの命を救い、誰かの中で生き続けてほしいと願う親の愛があってもいいではないか。臓器の提供を受け、命を繋ぎ、ドナーへの感謝とともにその2つの命を守り愛していきたいと願う愛があってもいいではないか。そのどれもが守られ認められる社会、日本へと成長してほしいと切に願っている。

【参考】

2010年臓器移植法案改正後 15歳未満の臓器提供 2例（内6歳未満1例）

心停止後の臓器提供15歳未満31例（内10歳未満18例）：1995.4～2011年末



「命をみつめて～小さな戦士達からのメッセージ」を聴いて

田村 博子

総会終了後、心理カウンセラーの阿波ひろみ先生のお話を聴きました。阿波先生の三男宏典くんは拘束型心筋症のため2007年、3歳の時にアメリカで心臓移植を受けられました。このことは数年前学校保健会でお話を聴かれた養護の先生から「とてもいいお話だったから」と阿波先生の著書「ミラクルボーイと呼ばれて」をいただいて知っていましたが、やはり実際にお話を聴くことは本を読む以上に大きなインパクトがありました。会場ではハンカチを目に当てて聴いておられる方もあり、講演後「渡航してまで移植を受けることに疑問を感じていたが、お話を聴いて、そんなものではないと思った。」「日頃の診療でこんなに命と向き合うことはないので、とてもいいお話を聴いた。」などの感想が聞かれました。

本当に、幼い子の闘病の姿に「そばにいて代わってやれないほど母にとってつらいことはない」という気持ちは痛いほどわかる気がしましたし、臓器を受ける立場が一転して提供する立場になる可能性を考えると、宏典くんはまさにミラクルボーイだったのだとよくわかりました。

阿波先生は三田尻高校（現・誠英高校）バレー部出身で体育教師をしていたとうかがってなるほどとを感じるような、すらっとして素敵な方でしたが、母として不安と闘いながら我が子を守るという体験に、ご自分でも知らなかったほどの力が発揮されたのだと思います。（たとえばアメリカでドクターの話す英語が必要なところはなぜだか聞き取れたとおっしゃっていました）でも、移植が成功した後で、メンタル不全になり、しばらく立ち直れなかったそうです。帰国後、ご自分のためにも心理カウンセラーの勉強をされたようでした。現在は県内のいろいろな学校から呼ばれてお話をされることが多いとのことですが、ご自分の体験を伝えることを使命と感じておられるようです。

病気や障害を抱える子どもに寄り添う家族のサポートをしたいと「愛つむぎの会 ハートブーケ」を立ち上げ、支援活動をされています。ホームページアドレスを記載しますので、アクセスしてみてください。

<http://www.ameblo.jp/manatumuginokai/>

